



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2009/12/ 3(木)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 60

「三上監督の呻吟」

今回は創成高校女子監督三上 淳先生に本人の考えているバスケットボール哲学について書いていただきました。頂上に手が届きそうなところまで来ているチームの苦悩について参考になることがたくさんあると思います。

ウィンターカップ北海道予選を終えて (今シーズンをふりかえり)

創成高等学校女子バスケットボール部
監督 三上 淳

帯広で大敗した後、前野先生 (前旭川工業高校監督) から電話がありました。内容は指導者育成委員会からの原稿依頼です。みんな小さいチームなのだから大きいチームにどう戦うかというあたりを書いて欲しいというお話でした。私の信念は「敗戦の将は何も語らず。」ということなので、今回の戦略・戦法・戦術を書いてもそれは全てただの言い訳になり、若いコーチの方のヒントにはならないと考え、お断りしようと思いましたが、前野先生には私の前チームであるジャパンエナジー (現 JOMO) 時代からとてもお世話になっていましたのでお断りせずにお受けすることにしました。

まず最初に、今シーズンの全ての大会関係者、運営、審判、特に帯広では冷たい雨の中、駐車場係りの方に感謝をいたします。

私は選手に常々、大会の裏方の皆さんのご苦勞を話しています。選手というのは周囲の人の色々な「おもい」を背負ってコートに立つものだ、だから自分たちの立ち姿からその人たちに何か感じてもらえる人間になり、そういうゲームをしなければならないと教育しています。11月はウィンターカップ北海道予選、新人札幌予選、オールジャパン北海道予選と全ての週末にゲームがありました。しかし、コーチも選手も本当はうれしいはずの月でしたが、一試合も何かを感じられたゲームがありませんでした。

大きなゲームの前に選手にはこう言っています。「心配する必要はなにもない。みんなの足りない部分は私が必ず助けてやるから。」実際のゲーム中も選手をどう助けてやるかということだけを考えてベンチワークをしています。しかし、今回 (11月中のゲーム) は何とかしてやろうと心から思えないゲームばかりでした。勝敗の点差は問題ではないと考えています。人間はどういう結果を残せたかということよりもどう生きたか。すなわち、点差ではなくどういう内容であったかが重要だと考えているからです。

11月の原因は選手の性格が悪いとか、さぼりとかそういうことでは一切ありません。私の選手たちはみんな性格のよい子で、学校では他の生徒の見本です。なんとなく原因はわかるのですが、まだ明確な解答がなく模索中です。答えが見つかりましたら、また何かの機会に書かせていただきたいと思います。今年のチームは、8年間の中で一番、バスケットボールの理解度が高く、ある程度の自信がありました。それだけにショックが大きくまだ頭の中がごちゃごちゃで、立ち直れません。

次に「弱者の兵法」について（今シーズンのチーム創り）私の考えをお話します。使用した戦術やドリルなどを期待されている方が多いと思いますが、上記の理由（ただの言い訳になる）、もうひとつはダイアグラムを描いて説明しなければならないのでその記載はしません。隠すつもりはありませんので練習に来ていただければいつでもご説明いたします。

私は昔から（実業団時代から）、外国の大きいチームにはどう戦えば勝てるのかな？？とそればかり考えていました。

バスケットボールは能力の高い大きなポストマンがいると安定したゲームができます。なぜかという、オフェンスで困ったとき（ドラウトの状態）に力づくで状況を打開するというもっともシンプルなプレーができるからです。しかし、小さいチームはそれできません。その為、小さいチームは安定して勝ち続け、よいゲームをすることは難しいというのが真実だと思います。ですが得点をとる方法は小さくてもあります。私は一人が0.1つつ相手を崩せばよいと指導しています。その結果、どこかの0.5崩せたところで勝負できればよいと考えているからです。

ただし、その前提にはアウトサイドのシュート力がある。スピードがある。この二点は必要不可欠です。

もう一つ小さいチームの最大の問題点はディフェンスにあります。ディフェンスとリバウンドをとることはオフェンスよりも大問題です。ディフェンスにはオフェンスよりも、もっとスピードと予測能力（アンティシペーション）が必要となります。

そこで私はスピードを二つに分けて考えています。一つは身体的な運動能力。もう一つは脳の判断能力です。では、はたして日本人の小さな選手が外国人の190cmの選手と比較してゲームで絶対的に有利にたてるほどの身体能力というスピードがあるのかどうか？答えはNOです。アメリカやヨーロッパには日本の小さい選手より早くて大きな選手がかなりいます。

これを自分の選手に置き換えた場合どうなるかと考えます。今年のチームは足が本当に遅い。校内陸上大会で普通は女子はバスケットボール部の選手が上位を独占します。ですが今年はそれがまったくできませんでした。

私はそれでもスピードの追及にこだわりました。身体的なスピードではなく、脳のスピードです。場面理解と状況判断に優れた選手を創る。すなわち、ゲームプレーヤーを創るということです（野球用語で使わせていただいています。個人的なことになりますが、日本ハムファイターズ、野村監督とサッカーのオシム監督のファンで野球とサッカーからは本当に作戦のヒントをいただいています。本州に合宿へ行くとおまえはサッカーしているのかと時々、強豪チームのコーチから言われることがあるくらいです。).

身体能力を鍛えることは数値になって表れやすいですが、ある程度の限界があります。しかし、視野が広く、今の場面を理解し、的確な状況判断の早い選手を創ることは数値には表れにくいですが、無限の可能性があると信じています。

そのためには場面理解を徹底して教え込まなければなりません。ゲームの物語をつくる（ゲームプラン）。実際にゲームを進めていく中で起承転結をどう運営していけばいいのか、今はどうなのか、次はどうなるのかというようなことを叩き込んだつもりでした。大阪インターハイでは本当に胸をはれる戦いをしてくれましたし、10月の金沢総合高校をお迎えしての招待試合では星沢先生に「速いな」と本当に嬉しいお言葉をいただき、手ごたえは感じていました。しかし11月の戦いには結果に表せませんでした……。

私の戦術の発想は全て「逆転の発想」です。簡単にいうとバスケットボールには囲碁という定石があります。しかし、小さなチームはセオリーどおりにオーソドックスなことをしては戦えませんからその逆を考え出しています。例えばミスマッチというのはほんとうに不利なのかな？と常に定石は疑ってかかることにしています。バスケットボールの教科書は無数にあります。そこには書かれていないことが三分の二はあると考えています。私の参考書をご紹介します。孫子の「兵法」、宮本武蔵の「五輪書」、孔子の「論語」です。ヒントが満載されています。毎日、ほんとに多くのことに挑戦していますが、バスケットボールはオーソドックスなチームがやはり強いという現実も否定できません。

最後にテーマとは関係ありませんが、この場をお借りして、北海道バスケットボール協会へ普及・強化の為にお願いがあります。

- ① タレントの発掘です。小学生から有能なタレントを探さなくてはなりません。待っているだけでは他競技にいつてしまいます。その仕組みをつくっていただきたいのです。
- ② 受け皿づくりです。ミニバスをやらせたいのだけど送り迎えができない、という声をよく聞きます。聞けば運動能力の高いお子さんもよくいるようです。何とかできないでしょうか？

サッカーのクラブチームは一切その心配はありません。

- ③ 才能ある選手が埋もれています。ミニバスはあるのだけど専門のコーチがいないのです、と言われます。ミニで活躍したのだけど中学校に専門のコーチがいないのです、という声をよく聞きます。

サッカーではトレセンという仕組みがあり、選手は埋もれません。

ここに目を向けて動き出さなければ強い北海道・さかんな北海道はできません。北海道が日本をリードするくらいの気持ちで、ぜひ、一考していただきたいと思います。

私は若者が汗を流して何かに打ち込んでいる姿が好きでコーチをしています。今の日本社会において貴重な若者たちだと思っています。これからも大きなチームをやっつける研究を続け、人が動き・ボールを動かし・観ている人の心を動かす、バスケットボールを目指して選手の成長を見守っていききたいと思っています。

今シーズンはオールジャパン出場を最終目標に3年生をプレーさせており、北海道予選が11月末にあるので、それが終わり次第すっきりした気持ちで書こうと思っていました。しかし、オールジャパン予選でも納得のいくゲームができず、負けてしまいました。今はどこかまったく誰とも会わないところへ逃げ出したいという気持ちです。こういうときは外国へバスケットボールを観に行くにかぎるのですが授業があるのでそれもできません。

とりとめもなく書き綴りましたが、今回は自分の頭を整理するため、勉強のために書かせていただきました。このような機会を与えていただきました。指導者育成委員会へお礼を申し上げます。